第 46 回講演会＜2017 年 6 月 19 日開催＞
グローバル・リテラシーとは何か：
マイノリティー言語と社会の視点から考える（第一弾）

危機言語に対する言語意識向上のために
～済州語の事例から～

梁　彰容（和訳＝ミラー成三）

■講演者……梁　彰容
（韓国・済州大学校教授）
■司会……矢頭典枝
（本学英米語学科准教授、グローバル・コミュニケーション研究所副所長）
■使用言語……英語

1.　はじめに

言語は私たちが毎日吸う空気のようなものです。これは物理的にはその通りなのですが、そうすると、次のような疑問が浮かんできます。私たちはなぜ言語を使用するのでしょうか。これに少し時間をかけて答えてみましょう。人間は、日常のコミュニケーションの中で、自分の考えを互いに伝え合うために言語を使用します。これは、他の動物のコミュニケーションとは異なります。鳥や蜂はダンスをしてコミュニケーションをとったりしますが、人間がするように言語を創造的に使用することはしません。

梁　彰容氏

他にも言語には多くの働きがありますが、このような意味で考えると、人は出会った人たちとネットワークを確立し、発展させ、そして維持していくために言語を使用していると言うこともできるでしょう。これは言語が、私たちを社会的な存在として決定づける一種の社会的なリンク（つながり）であることを意味しています。私たちがある言語を使用するとき、私たちは、言語によって気持ちが高められ、自分の考えが引き出されることで、社会とつながるのです。

世界では、約 7,000 の言語が話されていると言われています。そうなると当然、それと同じくらいの数の異なる考え方が存在していると推測できます。これが、世界中の言語の発展と消滅に直面する私たちが話し合わなければならない大きな理由の一つと言えるでしょう。この言語的な多様性は、人々が知的労働によって貴重な産物を創り出すときに大きな役割を果たしているということが広く知られています。ケン・ヘイル（Ken Hale）という言語学者は、その土地の現地語の消滅について、「多様で興味深い知的財産や、人間の精神的産業によるきわめて貴重な産物の、取り返しのつかない消滅でもある」と指摘しています[1]。また別の見方をすれば、現地語の消滅は、多様な文化、伝統的な知識、共同体の価値

などの消滅にも関わっています。言語学者の間では、言語は私たち個人、もしくは所属する共同体の自己イメージを反映すると考えられています。これは、私たちが言語を保存し、使用する、単純ですが本質的な理由だと言えるかもしれません。

これらのことを念頭に入れ、この講演では、危機言語について探りながら、言語の問題やその真の価値に対する意識の向上を試みます。とくに今回は、危機言語の一つである済州語（Jejueo）に焦点を当ててお話したいと思います。

2.　なぜ言語なのか？

2.1　あなたは何者？：アイデンティティ

言語は、私たちが人間として経験を重ねるうえで重要な役割を果たしており、私たちが話す言語は、私たちがどのように考え、どのように世界を見て、どのように生きるのかを深くはっきりと形づくっています。そのため私たち人間は、言語が私たちの存在の中心的な核であり、私たちが持つ他の何よりも自分の存在を形づくっているものだと感じています。すなわち、言語は共同体または個人のアイデンティティを象徴する印、もしくは指標として使われうるのです。そしてこれは、言語がアイデンティティや集団の利益の感覚を共有する人々を束ねることができるということを意味しています。このように言語は、人間文化独自のものとして、人々と自分たちの先祖や遺産とを結びつけるツールとなり、その歴史と自己イメージを通して、人間の経験の生来的な部分を構成しているのです。

2.2　なぜ危機言語を保存しなければならないのか？

世界の言語に関するデータベース「エスノローグ（Ethnologue）」のリストによると、2017 年 9 月現在、世界には 7,099 の言語が存在しています。驚くべきことに、そのうちわずか 3%の言語を話す人たちが、世界人口の 96%を占めています。では、他の言語はどうなってしまうのでしょうか。それらの言語は消滅の過程にあります。言語学の立場では、こうした消滅の危機に瀕している言語のことを「危機言語」と呼んでいます。

開会の挨拶をするファン先生

言語は日常生活においていくつかの機能を果たしています。これは、その言語がどのくらい使われているか、どのくらいの勢力を持っているかという「言語活力（Language vitality）」の強さを判断するときにも、複数の要因と関連づけて考える必要があることを意味しています。言語の消滅危機は、言語活力の評価に基づいており、複雑で相互関係のある複数の要因を考慮しなければなりません。言語活力には多くの判定方法がありますが、ユネスコの評価事項には、共同体の中にどれくらい話者がいるか、世代間の言語継承、言語を使用する領域、話者の言語バラエティに対する態度といったことが挙げられています。逆に言うと、このような多様な要因は、言語保持の過程にも関わってきます。複数の要因は、異なる社会状況において混ざり合い、互いに影響しあっているのです。

そうなると、次のような疑問が浮かびます。なぜ危機言語を保持するのでしょうか。これについて言語学者のウイリアム・オグレディ（William O'Grady）は、次の四つの理由を挙げています（O'Grady, 2017）[2]。

- 言語に関わる理由：
  世界のどの言語も、言語の働きとそれが時間とともにどのように変化しうるかについて、重要な手がかりを提供している。
- 遺産に関わる理由：
  危機言語はすべての共同体全体における言語的、文化的な財産である。例えば、済州語は済州島だけでなく韓国全体の財産である。
- 多様性に関わる理由：
  人間の生活のすべての面（芸術、音楽、舞踊、文学、言語）においては、様々なバリエーションと革新があることが望ましい。均一性は健全な文化のあらわれではない。
- アイデンティティに関わる理由：
  言語はアイデンティティや共同体に対する意識を高める。

3. 済州語のストーリー、済州の言語

3.1 済州と済州語

済州は火山島で、最後に噴火が起きたのは5,000 年ほど前になります。韓国最大の島として、70,000 年ほど前から人々が暮らしています。居住初期の状況と近代の島民との関係はあまり明らかにされていませんが、その孤立した地理的位置により、とても独特な文化的、自然的価値を持っています。済州島で話されている言語にも同様のことが言えるでしょう。

済州語は韓国の済州（島）で使用されている言語です。非常に長い間使われていますが、いつごろから済州で済州語が話されるようになったのか、詳しくはわかっていません。済州語は韓国語と共通した特徴を多く持っていますが、言語学的な観点から見ると、非常に独特なものです。その独自性は昔から明らかにされており、例えば、17 世紀に済州に6ヵ月滞在したある旅行者は、島民の話し言葉がなかなか理解できなかったと語っています。しかし、済州とその言語である済州語の資料は少なく、済州語と韓国語がいつごろ区別されるようになったのかを知ることは困難で、不可能だとも言えます。そのようなこともあり、済州語は今でも韓国語の方言、すなわち韓国の地方語として認識されています。

3.2 言語と方言

先に述べたように、済州語は韓国語の方言として知られています。これは政府主導の標準語政策が大きな理由で、韓国の地方の言語変種は、徹底して方言すなわち標準語よりもレベルの低い言語としてみなされていました。実のところ、韓国が独立した時期には、韓国人の多くは韓国語の読み書きができず、日本語と韓国語を併用していました。これが、新政府が標準語政策を積極的に進めた理由です。韓国の言語事情が政治的な事柄と密接に関係していることは想像に難くないでしょう。言語と方言の関係性について、オグレディ（O'Grady, 2017:1[3]）は、「近代の歴史の中で、'言語'と'方言'の区別は非常に政治的である。すなわち、より大きいあるいは権力のある共同体の言葉が言語であり、小さいあるいは影響力の小さい集団の言葉が方言とされる。（中略）" 言語とは、陸軍と海軍を持つ方言のことである "（マックス・ヴァインライヒ，Max Weinreich）」と指摘しています。しかし韓国では、済州島で話されている言語がきわめて独特で、相互に理解が難しいという認識が一般的にあります。韓国語の言語変種の一つとして、済州の言語は独立した社会的地位を持っていると言えるでしょう。

3.3 相互理解の難しさ

言語学者による近年の学術的努力と、済州語の活動家による意識向上運動によって、言語と方言の認識に関わる問題は少しずつ改善されてきています。ある言語学者は、言語と方言を区別する基準は言語学的であるべきだと主張しています。つまり、言語と方言は相

互理解の難しさに基づいて区別されるべきで、二つの方言が互いに理解が難しい場合には異なる言語として分類されるべきだと述べています。

済州語と韓国語との関係について言うと、最近の研究では、済州の言語は韓国の他の地域の言語とは相互理解が困難であり、これらを異なる言語としてみなすべきではないかという議論がなされています。さらに最近、私は自分の研究チームを立ち上げ、済州語の理解度を分析するための実験を行いました。そして、済州語が韓国語とは異なる「姉妹語」であるという事実を明らかにしました。

共通の起源を探っていくと、済州語と韓国語は同じ系統の語族に分類されます。言語学的な観点から見ると、両言語の類似点と相違点には規則性があり、これは、ある言語と言語とが相互に持つ関連性と非常によく似ています。このような分析から、済州語は韓国語の姉妹語であるとみなすことができ、さらにそれは、済州語が韓国語の方言ではなく、韓国・朝鮮語族の言語の一つであることに疑いがないことを証明しています。

3.4　済州語：過去から現在まで

済州では、大きく分けると、朝鮮戦争(1950-1953)が言語の地位の転換点になっています。朝鮮戦争の前までの済州は、済州語が優勢とされるモノリンガルな社会と言うことができました。ところが、戦後になると韓国語が流入し、バイリンガルな社会へと変化しました。これには二つの理由があります。まず一つは、中央政府が国の均一化のため、学校や公共領域における済州語の使用を禁止する言語政策を進めたことです。そして二つ目は、韓国語が社会的、経済的な文脈において高い地位を持っていたため、済州の人々が標準韓国語を学ぶことを望んだことが挙げられます。結果として、済州の様々な領域において済州語は使用されなくなっていきました。

3.5　済州語の現状

済州語が独立した言語であるという認識のもと、地域の活動家や言語学者および地方の行政は、済州の言語を保存する努力を行ってきました。彼らの努力の結果、済州語は 2010 年に、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が発行した『消滅の危機にある世界の言語地図(Atlas of the World's Languages in Danger)』において、「非常に深刻な消滅危機にある言語(critically endangered language)」に認定されました。

貴重な文化財産である済州語のユネスコへの登録は、地域コミュニティによる済州語の保存活動を強く推進することになりました。このユネスコ登録以降の地域による様々な努力は、主にトップダウンのものとボトムアップのものにまとめることができます。トップダウンのものには、経済的な援助や言語計画などの行政的な努力が含まれます。特に、済州の地方政府が「済州語の保存と活性化運動(Jeju Language Preservation and Promotion Act)」を公式に発表したのは印象的です。他方、ボトムアップのものは個人や NPO 団体による積極的な努力が挙げられます。その中で、済州語保存学会は、基礎済州語コースの開講、済州語スピーチコンテストの開催、他の言語による記録などのプログラムを行っており、大きな役割を担っています。これらの様々な活動やプログラムを通して、済州語の保存に対する運動は再び勢いを取り戻しています。

講演をする梁氏と会場の様子

4. 展望

繰り返しになりますが、言語は疑いなく、私たちの生活に欠かすことができないものです。言語を失うということは、共同体が共有する世界観、文化、そして知識を失うことを意味します。これが、私たちが危機言語を気にかけなければならない理由です。

言語の保存に対する努力には長期間にわたる働きかけが求められ、言語としての土壌を再び得るためには政治的な援助と言語学者の関与が必要になります。このような言語保存に関しては、アメリカ合衆国におけるハワイ語、ニュージーランドにおけるマオリ語、ヨーロッパにおける多数の地方言語など、様々なモデルがあります。

済州の人々も、他の危機言語を話す人々と同様に、権力によって無視され、ときには抑圧されてきた自分たちの母国語、済州語について心配をしています。しかし、危機的な状況にありながらも済州語は、済州文化の懸け橋として、その言語的な価値に対する意識が高まっており、地域コミュニティの主な焦点となっています。

注

1） Hale, Ken. 1995. Universal Grammar and the necessity of linguistic diversity. Presidential address delivered at the annual meeting of the Linguistic Society of America, New Orleans.

2） O'Grady, William. 2017. Jejueo: Korea's Other Language. Invited talk at the 2017 Spring Conference for the Linguistics Society of Korea. May. 27. 2017. Korea University, Seoul.

3） O'Grady, William., ibid.